

## 思い悩むな

【聖書】出エジプト記16章1～15節

イスラエルの人々の共同体全体はエリムを出発し、エリムとシナイとの間にあるシンの荒れ野に向かった。それはエジプトの国を出た年の第二の月の十五日であった。荒れ野に入ると、イスラエルの人々の共同体全体はモーセとアロンに向かって不平を述べ立てた。イスラエルの人々は彼らに言った。

「我々はエジプトの国で、主の手にかかって、死んだ方がましだった。あのときは肉のたくさん入った鍋の前に座り、パンを腹いっぱい食べられたのに。あなたたちは我々をこの荒れ野に連れ出し、この全会衆を飢え死にさせようとしている。」

主はモーセに言われた。「見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。わたしは、彼らがわたしの指示どおりにするかどうかを試す。ただし、六日目に家に持ち帰ったものを整えれば、毎日集める分の二倍になっている。」

モーセとアロンはすべてのイスラエルの人々に向かって言った。「夕暮れに、あなたたちは、主があなたたちをエジプトの国から導き出されたことを知り、朝に、主の栄光を見る。あなたたちが主に向かって不平を述べるのを主が聞かれたからだ。我々が何者なので、我々に向かって不平を述べるのか。」

モーセは更に言った。「主は夕暮れに、あなたたちに肉を与えて食べさせ、朝にパンを与えて満腹にさせられる。主は、あなたたちが主に向かって述べた不平を、聞かれたからだ。一体、我々は何者なのか。あなたたちは我々に向かってではなく、実は、主に向かって不平を述べているのだ。」

モーセがアロンに、「あなたはイスラエルの人々の共同体全体に向かって、主があなたたちの不平を聞かれたから、主の前に集まれと命じなさい」と言うと、アロンはイスラエルの人々の共同体全体にそのことを命じた。彼らが荒れ野の方を見ると、見よ、主の栄光が雲の中に現れた。主はモーセに仰せになった。

「わたしは、イスラエルの人々の不平を聞いた。彼らに伝えるがよい。『あなたたちは夕暮れには肉を食べ、朝にはパンを食べて満腹する。あなたたちはこうして、わたしがあなたたちの神、主であることを知るようになる』と。」

夕方になると、うずらが飛んで来て、宿営を覆い、朝には宿営の周りに露が降りた。この降りた露が蒸発すると、見よ、荒れ野の地表を覆って薄くて壊れやすいものが大地の霜のように薄く残っていた。イスラエルの人々はそれを見て、これは一体何だろうと、口々に言った。彼らはそれが何であるか知らなかったからである。モーセは彼らに言った。「これこそ、主があなたたちに食物として与えられたパンである。」

### 【序】エジプト脱出

今日は旧約聖書「出エジプト記」の第9回の学びです。紀元前1400年～1300年頃のエジプトでの出来事です。約150万人の民族集団に成長したイスラエルに危険を感じたエジプト王は、彼らを奴隷として苛酷に扱うようになりました。助けを求める彼らの悲痛な祈りに応えて、神はモーセを指導者に立てて国王と交渉させました。

モーセは「荒れ野に出て行って神を礼拝したい」と申し出ましたが、国王は聞く耳を持ちません。しかし様々な神の意思表示の末に、エジプト中の初子が皆死ぬという厳しい神の裁

きが下るに及んで王は屈服し、直ちに出て行くよう許可しました。すると神はこの民を、ペリシテ街道を直進する近道ではなく 荒れ野を南下して葦の海を渡る遠回りの道へと導かれたのです。

それを見て、イスラエルが道を見失い、荒れ野で迷っていると思った王は、心変わりして精鋭の戦車隊を先頭に全部隊で彼らを葦の海辺に追い詰め、襲いかかろうとしました。しかし神は激しい風を吹きつけて海の水を引かせ、イスラエルの大集団を向こう岸に渡らせると、水を元に戻して、その後を追いかけて来たエジプト全軍を、海の中で溺れ死させてしまわれました。

## [1] 不安におびえる

さて無事にエジプトを脱出したイスラエルの大集団は、シナイ半島の北部をまっすぐに東に向かってカナンに進むと思いきや、モーセの導きで紅海に沿ってシナイ半島の西のへりを南下しそれからシンの荒れ野を進み始めたのです。これは後でわかったことですが、羊飼いをしていたモーセが神に召された場所神の山ホレブに向かう道でした。

あの時彼は、「あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの 山で神に仕える」( 3:12) と神から言われていました。確かにその通り、神は ホレブの山で、エジプトの奴隷にされていたイスラエルを神の民に整える 10 の 戒律 (十戒) を、お与えになりました。また神を礼拝する幕屋をきちんと造らせなさいました。

しかしその神の約束・神の計画を知らされていなかった民は、どうして目的地から遠く離れたシンの荒れ野に入っていくのか、これでは食糧が不足し飢死してしまうのではないかという不安に襲われ始めて、モーセとアロンに不平を述べたて始めたのでしょう。

イスラエルの民はエジプト脱出に際して、エジプト中の初子が皆死んだのに、自分たちの初子は守られた大奇跡、葦の海で自分たちは救い出されたのに、エジプト軍は全滅した大奇跡を、二度も目の当たりに経験したのです。神が強い手をもって、世界を支配して居られる万軍の主であることが、よくよく分かったはずですが、その主なる神が、自分たちと共にいて下さり、守り導いて下さっているのです。

それなのに、エジプトの居住地を出立して1ヶ月しか経っていないのに、自分たちの手持ちの食糧が無くなる不安におびえて、「エジプトの国で死んだ方がましだった」などと不平を述べたて始めたのでした。これは一体どうしたことでしょうか？

## [2] 一番根深い思い煩い

私はここでイエス・キリストのあの有名な山上の説教 (マタイ福音書5～7章) の中の言葉が心に浮かんできました。「だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を

飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか」(6:25~26)。

私たち人間にとっては、何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかという思い煩い、即ち命についての思い煩いが、一番根深い悩みだということを、主イエスは見抜いておられるのですね。つい先日も、「ファッションの店員につきすすめられて、買うつもりがなかったのに買わされてしまう」という少女の悩みが、新聞に出ていました。そうですね。デパートに行くと、さまざまな趣向を凝らした着る物、身につけるもので溢れています。これでは、何を着ようかと思ひ悩まされます。

私は着る物には頓着しない方ですが、毎日家に居て三食、栄養のバランスのとれた美味しい食事を作って食べさせてくれる妻には、心から感謝しています。なにしろ牧師は、殆どの食事を家で食べていますから妻は大変です。食べる度に幸せだなあとしみじみ思っています。ですから食べることに事欠くようになったら、私は真先に思ひ悩み、精気を失うのではないかと恐れます。

イスラエルの大集団は、過越しの夜に突然国王から直ぐに出て行けと命じられて、パンも焼き上げる暇もなく、酵母の入っていない練り粉をこね鉢ごと外套に包んで肩に担いで出立したのでした(12:34)。ですからカナンに向かう長い道中のために、十分な食料を携えての旅ではなかったと思います。それが彼らの一番の不安、心配だったのではないのでしょうか。

確かに、夜中に突然初子の死を体験させられたエジプト中の親の嘆きは如何ばかりだったことでしょう。その泣き声を聞きながら、小羊の血を家の柱に塗ることで神の裁きが通り過ぎて、我が子の命が守られたイスラエルの親たちの安堵と感謝は如何ばかりだったことでしょう。

またエジプト軍に追い詰められて絶対絶命の窮地に立たされた葦の海辺で、激しい風をもって海の水を押しやり、一筋の逃げ道を開いて向こう岸に渡らせ、その後で水を元の状態に戻して、エジプト軍を海中で全滅させた全能の主なる神の強い手の働きも、目を見張らせる大奇跡でした。

しかしイスラエルの人々にとっては、大きなドラマの感動よりも、何を食べ、何を飲むかという毎日生きていくことの命の保証の方が、より身近で切実な関心事だったのでした。ですから大ドラマはドラマとして感銘を受けながらも、明日のパンと肉をどうしてくれるのかという不安を、指導者モーセにぶつけずにはおれなくなってきたのではないのでしょうか。

それに対して神は、夕方にうずらの大群を飛んで来させて宿営を覆い、人々に捕えさせ、朝にはマナを地表に覆わせて乾くとパン代わりに食べさせて、命を養って下さったのでした。そしてこの神の配慮は、カナン之地に到着するまで 40 年間保障して下さったのでした。この神さまが荒れ野の旅路と一緒に進んで下さっているのです。だから彼らは飢えることなく、旅を続けることが出来たのでした。

「信仰の薄い者たちよ。だから『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って思い悩むな。それらはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存知である。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすればこれらのものはみな加えて与えられる」(マタイ 6:30～33)。 神の国とは神の支配のことです。神の義とは私たち人間の不義、不誠実にも拘らず、神は正しく振まって下さることです。偽善を裁いてくださることです。

ですから神の国と神の義を求めるとは、この罪深い私たちにも、生きていく上で最も必要なものをよくご存知で、整えて下さる天の父を信頼しきることです。そうすれば食べること、飲むこと、着ることもみな与えられるのです。思い悩むことはないのです。荒れ野を旅するイスラエルの人々は、この信仰をしっかりと持つべきだったのでした。

### **【結】 明日のことまで思い悩むな**

私たち川越教会は、やっと会員 29 名に回復してきました。しかし依然として小さな群れです。しかも 60 才以上が 21 名で 30 才から 59 才までが 8 人。高齢者の集団です。或る人は 5 年たったら教会が立ちゆかなくなるのではないかと心配しています。若い人が増えてくれるように何としても努力しなければなりません。しかし直ぐに効果が現れる具体策がなかなか出てきません。

私も 83 才になりました。85 才で引退をと、牧師招聘委員会も発足しました。積極的に世代の若返りと取り組んでくれる牧師が与えられるのでしょうか。あれこれと今後は思いながら、私は今日の説教を準備していました。荒れ野を進みながら、手持ちの食糧不足から将来が不安になってきたイスラエルの姿が、川越教会と重ね合わされて心に浮かんできたのです。

そして「だから、明日のことまで思い悩むな」という主の御言葉が心にひびいてきました。確かに現在の川越教会は、小さくてしかも圧倒的高齢者の集団です。しかしそこで、将来に不安を抱いて後向きになるとすれば、エジプトに引き返そうとするイスラエルと同じではないでしょうか。

全能の主なる神は、うずらの群れとマナとをもって、この不信仰なイスラエルを養い続けて前進させて下さったのでした。だとしますと、神は今日のこの聖書を通して、私たちにメッセージを語りかけて下さって居ることになります。

「明日のことは明日自らが思い悩む」。今日与えられた課題は、今日受けとめて全力を尽くして、思い悩みつつ取り組む。そして明日は明日で、また全力を尽くして思い悩みつつ取り組めばよい。現在の私たちは私たちなりに、川越教会の将来のために思い悩みつつ全力を挙げて、今日与えられた課題と取り組み、明日のことは、新しい明日の人たちにバトンタッチして行けば良いのではないのでしょうか。自分が死んでしまったら、その後どうなるのか、それは明日のことまで思い悩むことではないか、と気が付かされたのでした。我田引水に過ぎるでしょうか。皆さんは如何がお考えですか。どうぞ皆さんも聖書を読みつつ、祈りつつ、お考えになってみてください。そしてとにかく、今日の命を与えてくださっている神さまの養いに全幅の信頼を寄せて、周りの方々に信仰の証しをたてて参りましょう。神さまは、必ず教会の明日を担う信仰者を私たちの群れにお加え下さると信じて、今日を歩んで参りましょう。

お祈りします：主よ、今日もまた、聖書の言葉を通して私たちに語りかけ、御心をお示し下さる恵みを感謝します。貴方の御心は私たちの思いを超えて深く、豊かです。同じ聖書の箇所からでも、一人一人異なる聞き取り方をするものです。どうか各自が聞き取った御心を分かち合って、私たちの信仰を深め合うことが出来ますようにお導きください。イエスさま、十字架の死をもってご自身の愛を私たちにお注ぎ下さっている恵みを感謝します。川越教会をお導き下さい。祝福して下さい。主イエスの御名によってお祈りします。アーメン